

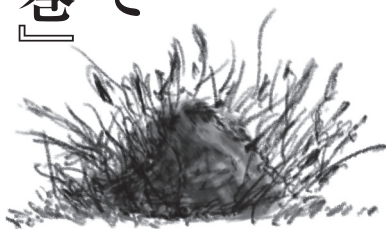
小島ゆかり ◎歌人

辻原登 ◎作家

長谷川權 ◎俳人

半歌仙

『刈り刈りて 夏草の巻』



昨年十月二十九日に神奈川近代文学館で開かれた「かなぶん連句会」は、三人の選者が作った句に続く句を参加者が考え、半歌仙の連句を完成させるという連句創作の催し。参加者が一体となって楽しんだ当日の模様をレポートする。

つかず離れずのつながりを紡いでいく

【はじめに】

長谷川 はじめに、おめでたいお知らせがあります。二〇二二年度の文化功労者に辻原さんが選ばれました。小説家として長年、フィクションに関わってこられたわけですが、人間にとってフィクションはなぜ必要なのか、どんな意味をもっているのか、会場の皆さんにお話しただけませんか。

辻原 僕は、人間は言語的動物なのだと思っています。例えば「私は人間である」というのは言語の構文ですが、ここからフィクションは始まっています。我々が、私は人間である、と言えるのと同様に、僕が、私は猿である、私は女である、と言うことも成立します。こうした言語のつながりが人間世界を作っているとしたり、言語の構造がフィクションであるということも言えるのではないのでしょうか。

人類の始まりには神話があります。この神話こそ、起源を信じることによって始まるフィクションです。そう考えると、人類はフィクションの中に存在していて、そこで小説を書いている僕も、ある意味では正しいことをしているのかもしれない。

長谷川 小島さんは何年も前から伊勢神宮での観月会で選者をされていますね。

小島 これは中秋の名月を愛でながら、全国から応募のあつた短歌や俳句の秀作を、神宮の講師が古式にのっとり披露する催しです。水上舞台で管弦や舞楽が奏行され、雅な世界に引き込まれるうちに夜が更けていきます。水面に映るぼんぼりの明りが生き物のように揺らぎはじめ、神宮の背後の森から光が差してきて月の出となります。なんとも言えない時間で、私は月を観ているのだけれど、これはフィクションなのだろうか、という気分になります。素晴らしい催しです。

【初表・発句】

長谷川 では、連句会を始めましょう。すでに表六句は出来ていますから、その解説からお願いします。

辻原 今回の発句は、夏の句でした。「夏草や刈つても刈つても生えて来る」は、実体験から生まれた句です。僕は横浜の保土ヶ谷に住んでいます。夏の日に家の近所を散歩していると、おばあさんが畑の草を刈り焼いていました。とても暑い日だったことを憶えています。夏草は刈つても刈つても生えてくるんですわ」とおっしゃるおばあさんと話をしました。する

半歌仙『刈り刈りて夏草の巻』

【初折の表】

発句 夏草や刈つても刈つても生えて来る

- 脇 戦車を襲ふ黒山の蟻 登 (夏)
- 第三 国境の夜空をわたる風はるか 權 (夏)
- 四 上善如水秋意尽くせり 登 (秋)
- 五 丸々と夕顔の実も望月も 權 (秋・月)
- 六 あらへうふらへう露のたましひ ゆかり (秋)

【初折の裏】

- 初句 海荒れる夜のアネロイド気圧計 清之 (雑)
- 二 男前なるオコゼのひげに 正 (夏)
- 三 最後まで追つたりしない恋の猫 理恵 (春)
- 四 春雷の夜慰謝料はらう 登紀和春 (春)
- 五 この道を左に行けば月山に 滋子 (雑)
- 六 ウルトランマンはかすかに笑う 登紀和春 (雑)
- 七 向かいよりゴゴゴと来たりラッセル車 温岩 (冬)
- 八 サイフ忘れて駅で足止め 大樹 (雑)
- 九 通り雨一眠りすれば青空へ 凌久 (雑)
- 十 ヨウと言う右肩の毛虫 匠 (夏)
- 十一 函館はジンギスカンの花見する 木屑 (春花)
- 折端 バス停で待つすべての春を 登紀和春 (春)